追悼文

松本誠一名誉会員の御業績を偲んで

日本気象学会名誉会員の松本誠一先生は2019年１月28日に96歳で逝去されました．私は1962年秋から気象研究所に勤務し御指導を頂きましたので古い記憶をたどって御業績を偲びます．当時からの習慣で先輩の方々を「さん」と書くことにいたします．

松本さんは1922年に誕生され，1945年東京帝国大学卒業後中央気象台研究部（後の気象庁気象研究所；杉並区高円寺，予報研究部）に勤務されました．当時は大規模現象を研究され１年間米国での研究生活を経験され，1957年に傾圧大気中の擾乱の研究で東京大学から学位を得られ，地人書館刊行の「気象講座」の「大気大循環」を書かれました（毛利圭太郎さんと共著）．

御自身の興味からなのか気象庁の要請によるものかは不明ですが，1961年には日本の豪雨・豪雪の研究を始められ気象研究所の方々と「1961年６月豪雨の解析」や，「1962年１月豪雪の解析」を発表されています．そして1962年度から５年計画の「北陸豪雪特別研究」が始まり予報研究部第一研究室長の松本さんがプロジェクトリーダーを務められました．この研究には多くの議論がありました．「官主導計画」が経常研究を圧迫する危惧や，観測の有効性への疑問があり，「中小規模現象の研究を疑問視」する人も居ました（当時の準地衡風モデルでは中小規模擾乱はノイズとして除去される現象でした）．もちろん意義を認められる方々も多く，私は1958年学部での指導教官の都田菊郎さんから「中小規模擾乱は興味あるテーマの一つだ」と教えられ，1961－62年の米国滞在中観測的研究の大切さを知りました．

気象庁・舞鶴海洋気象台・北陸の気象台の支援のもと松本さんはプロジェクトを着実に運営されました．1963年１月には「北陸豪雪」が発現し，寒気渦，気団変質や擾乱の解析が進められました．

松本さんのプロジェクト推進には特徴がありました．第１には研究室メンバーの専門性を尊重され観測への直接的参加を強制されませんでした．プロジェクト途中でも，各人の意思による長期の在外研究，他機関への移籍なども気持ちよく理解されました．各人の研究も自由に任され，しかも随時相談に答えられ議論をして頂きました．第２に現地気象台の方々との知識交換を重視されました．この時代は現地気象官署の調査活動は活発で気象集誌に投稿され学位を取られた方もおられました．研究成果は1969年に気象庁技術報告第66号にも纏められました．この研究成果によって1969年の気象学会賞を受賞されました．

ご遺族からご提供いただいた写真．

松本さんは1967年７月豪雨の研究を経常研究として始められ幾つかの共著論文を発表され，1968年度からの５年計画の「梅雨末期集中豪雨特別研究」のプロジェクトリーダーを務められました．

このプロジェクトでも福岡・大阪管区気象台，長崎海洋気象台等の気象官署の方々との交流を大切にされ，その方々の調査報告から多くのヒントを読み取られました．梅雨前線の構造，下層ジェット，中間規模低気圧，降水セルなど多くの解析的事実の共著論文を発表されました．これらの成果は現在では常識的知識となっております．私は1968－70年にポスドク研究員としてシカゴ大学藤田哲也教授のプロジェクトに参加して「梅雨末期豪雨の研究」には参加しませんでしたが，しばしば手紙で梅雨前線豪雨研究の進捗や飛騨川豪雨などをお知らせ頂きました．

松本さんは1970年４月福岡管区気象台技術部長に転

© 2019　日本気象学会

出され私がプロジェクトを引き継ぐことになりました．福岡管区の研究観測は松本さんが取り纏められ，プロジェクトの方々が研究を進められたため私の負担は生じませんでした．松本さんは福岡でも梅雨前線豪雨に関連した幾つかの実態的な論文をまとめられました．短期間渡米され，中規模現象の研究体制・予報監視体制を視察され，「日米協力研究」で五大湖の降雪に関する研究にも参加されました．大学連合を中心とする「黒潮流域の気団変質の研究計画（AMTEX）」についての提言も書かれましたがこれがAMTEXの準備委員会で検討された記憶はありません．

この頃「観測期間中に豪雨が発現しない場合は失敗ではないか？」，「研究が予測に役立つのか？」の質問を上級管理職の方々から受けました．これに対して松本さんも私も「特異現象の理解には非特異現象との比較も大切である．」「研究成果を予報精度の向上に生かすには，観測システム・情報処理システム・業務形態の改善が必要である．」と答えましたが理解・同意が得られない場合もありました．

その後，松本さんは気象庁予報課長・仙台管区気象台長・東京管区気象台長・海洋気象部長を務められました．管理職は調査・研究をするべきではないとする風潮があり研究活動は中断しておられましたが，その後の気象衛星センター所長・気象研究所長の在職中には2編の共著論文を書かれました．リタイア後は多くのアイデアをお持ちにも関わらず調査・研究活動を再開されませんでした．日本では個人的な活動が困難なことを残念に思います．松本さんは，「ジェットストリーム」の訳本，「海洋気象（海洋学講座3）」の第4章「気団変質」，「新総観気象学（気象学のプロムナード6）」の著作もされました．そして豪雨・豪雪にかかわる中小規模現象の先駆的研究の御功績により2008年に藤原賞を受賞されました．

これらのプロジェクトの時代には静止気象衛星，AMeDASは無く，レーダもデジタル化されず，観測船の高層風観測装置も無く，利用できる計算機資源も貧弱で，北半球プリミティブモデルも運用されていませんでした．このため多くの課題（極渦の変動と寒気吹き出し・寒冷渦の関係，日本海・東シナ海・日本南岸低気圧の差異，日本近傍と中国大陸上の梅雨前線の降水系の差異，湿舌とatmospheric riverとの関連，豪雨・豪雪事例のドキュメントの作成，メソスケールシステムの統一的理解など）が残されました．その後多くの方々が研究を進められておられますが，御遺志を継いで日本列島周囲の気象現象の総合的理解をさらに深めることが必要だと思います．

あらためて長年にわたる温かい御指導・御厚誼に御礼申し上げ，ご冥福を御祈りいたします．

（二宮洸三）